

高冷地帯における借地による露地野菜協業の成立条件

藤原 武利・工藤 啓治郎・高橋 義尚

(岩手県園芸試験場高冷地開発センター)

The Formative Conditions of Cooperation on Vegetable Culture by Leasing Farm in Highland Cool-zone

Taketoshi FUJIWARA, Keijirō KUDŌ and Yoshinao TAKAHASHI

(Highland Cool-zone Development Center, Iwate Horticultural Experiment Station)

1 は し が き

県内には自然的、社会経済的条件により耕作放棄されている農地が多く、特に標高 500 m 以上になるとその傾向が強い。このような土地を高度に活用することは農家の経営規模拡大と所得増大に役立つ。

現在、県内で高標高地帯の牧草地を普通畑として利用している面積は約 200 ha、利用計画中のもの 100 ha、今後利用可能とされているものを含めおよそ 1,500 ha と推定される。一方、遊休農地の活用に当たっては市町村、農協、牧野利用組合などが仲介となり農地を個人や共同組織に貸付けしている例が多い。

ここでは、既存農家が経営規模拡大の方法として、荒廃草地を借りレタスを協業で栽培している事例を中心に、今

後における借地による野菜作協業経営の成立条件について報告する。なお集落の概況は表 1 のとおりである。

表 1 対象地域の経営概況 (資料: 55年センサス)

専業別農家戸数(戸)				1戸当り耕地面積(a)				肉 牛	1戸当り山林 面積 (ha)
専業	1兼	2兼	水田	畑(牧草地含)	樹園地	計			
21	7	10	4	56	73	0	129	3	10.0

2 安代町戸沢野菜生産組合の概況

(1) 調査対象は、二戸郡安代町戸沢集落 21 戸のうち昭和 52 年度発足した「戸沢野菜生産組合(任意)」で、構成員は 5 戸である(表 2)。

表 2 組合員の経営概要

(昭和 56 年)

農家戸数	専 兼 別	経営主と農業従事者数（人）					経営耕地面積（a）（借地含む）			
		経営主の 年令 （才）	家 族 数	農業従事者数			水 田	畑 （借地）	牧草地 （I）	合 計 （借地）
				計	男	女				
合 計 5 戸	専 2 戸 1 兼 3 戸	50.6	16	10	5	5	335	777 (350)	60	1,172 (350)

(2) 借地場所は、集落から 19 km 離れた標高 550 m の安比高原地域で荒廃草地 3.5 ha を 2 戸の兼業農家から借地し、2 か年にわたって畑地化して土壌改良を行い、冷涼な気象条件を活用した 8 月出荷のレタス栽培に成功している。

(3) 組合発足の動機は、経営耕地が 1.6 ha と零細で、しかも集落内での耕地規模の拡大が困難なことから併せて、夏期就業日数の増大を意図して通勤によるレタス栽培の協業に踏みきったものである。

なお、集落におけるレタス栽培は昭和 42 年に農協の指導を受け実施したのが初めてである。しかし、栽培面積が少なく技術水準も未熟で出荷数量も少ないなどの理由から系統出荷は中断している。

昭和 44 年、岩印青果株式会社から「野菜は適地適産と市場に敏感に対応出来る生産と出荷体制を具備しなければならない」との指導を受け本格的なレタス栽培に踏みきり、現在は全面系統出荷している。

2.7 ha、アスパラガス 0.8 ha である。

(2) 出役は完全平等出役方式をとり、機械の共同利用や栽培管理が適期に出来るよう計画的に作業を実施している。特に、参加農家の既存耕地の農作業と協業のレタス管理作業への出役と機械等の利用状況は表 3 の通りである。

また、共同出役時における時間配分は表 4 のとおりできわめて計画的、合理的な作業が行われている。

(3) 昭和 56 年度は冷害と台風害により平年に比べ生産量、品質とも良い作柄ではなかった。しかし諸経費を差し引いた所得額は約 333 万円余で、構成員 1 戸当たり平均 66 万 6 千円余となり好成績をあげている(表 5)。

(4) レタスの 10 a 当たりの収益は、粗収益 255,296 円、費用が 155,438 円で所得は 110,158 円となり、県の所得指標 120,425 円にくらべ 10,267 円少なかった。

(5) 農協が出荷する端境期である 8 月のレタスは、戸沢生産組合が生産したものが全体の 96% と多くを占めている。

3 協業によるレタス生産活動の状況

(1) 借地している 3.5 ha の品目別栽培面積は、レタスが

4 野菜協業の成立条件

(1) 当組合は、「必ず成功するのだ」との意気込みで発足以来、共同作業の合理的運営をはじめ新技術の修得、新

表3 協業作業への月別出役と機械等利用状況

(昭和56年)

月 出役 状況等	5			6			7			8			合 計
	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	
出 役 回 数	1回	1回	6回	2回	1回	4回	2回	5回	5回	5回			27回
出 役 人 数	10人	8人	21.3人	15人	9人	21人	15人	37.5人	51人	46人			233.8人
1回当たり 出 役 人 数	10人	8人	3.6人	7人	9人	5.3人	7.5人	7.5人	10.2人	9.2人			8.7人
自 動 車 利 用 台 数	2台	2台	10台	2台	2台	5台	2台	10台	7台	9台			51台 27回
トラクター 利 用 台 数	5台 1台	1台 1回	8台 6回	2台 2回	1台 1回	0	0	4台 4回	3台 3回	11台 5回			35台 23回
主な作業名	耕起 整地 施肥 1.レタスの定植準備 と定植(1~4回) 2.アスパラガス定植						1.病害虫防除 2.除草剤散布 3.手取除草			1.レタスの収穫出荷 2.手取除草 3.収穫後は場整理			

注. 4月の播種・育苗管理は各参加農家で実施。

表4 共同出役時における時間配分(一日の作業日程)

作 業 名	作 業 開始時間 (時.分)	作 業 終了時間 (時.分)	同左農作業 従事時間 (時.分)
1.畑地への移動	5.00	5.30	
2.休けい及び作業準備	5.30	5.50	
3.農 作 業	5.50	7.30	1.40
4.朝 食	7.30	8.30	
5.農 作 業	8.30	10.30	2.00
6.午前の休けい	10.30	10.50	
7.農 作 業	10.50	12.20	1.30
8.昼 食	12.20	13.20	
9.農 作 業	13.20	15.30	2.10
10.午後の休けい	15.30	16.00	
11.農 作 業	16.00	18.30	2.30
12.帰宅,移動	18.30	19.00	
合 計			9.50

表5 レタス10a当たり収益性

項 目	年 度 作 型	5 6
		夏どりレタス、(一部マルチ栽培)
粗 収 益	収 量	340 c/s
	単 価	732 円
	販 売 収 益	248,880 円
	農協持込運賃還付金	6,716
	粗 収 益 合 計 (円)	255,596
費 用	種 苗 費 (円)	1,172
	肥 料 費	19,617
	農 薬 費	11,595
	光 熱 動 力 費	3,236
	諸 材 料 費	43,197
	賃 借 料	142
	農 機 具 費	4,572
	建 物 施 設 費	3,206
	流 通 経 費	60,813
	雇 用 労 賃	888
	借 地 料	7,000
	費 用 合 計	155,438
所 得	得 (円)	110,158
所 得 率	率 (%)	39.2
時 間	労 働 時 間 (h)	92.6
	通 勤 時 間 (h)	8.8
	合 計 (h)	101.4

作物の試作に取り組み着々とその成果をあげている。

(2) 利益の配分は出役に応じ適正な配分をしている。また、収穫時期が近づくとう出荷先市場の責任者を引き作況判定会と市場動向研修会を開催すると共に、6月から9月まで毎月1回出荷先市場視察をし消費者ニーズの情報を得ている。

(3) 53年から系統出荷になると共に役場、農協、普及所の指導を受け、組合員一人、一人が組織の充実強化とその発展に努力している。

(4) 集落には公民館があり部落の諸行事は公民館を中心に活発に展開している。特に昭和30年以降は毎月15日を農休日と設定し、当日は全戸が公民館に集り部落の諸連絡や方針を相談し、昼食会や夕食には全員が集い水田転作でとれた「そば食パーティ」や民謡大会、料理や手芸コンクール、文化講演会を開催するなど親睦をはかっている。

(5) こうした部落の諸活動のなかで戸沢野菜生産組合の構成員全員が部落組織の各リーダーとして活躍している。

すなわち、組合員は集落づくりと心の通いあう共存共栄の精神があり、このことがレタスを中心とした通勤による協業を成立させている。

5 集落及び協業の新しい方向

56年度は集落全体で話し合い、出稼ぎのない活力あるむらづくり形成のため「集落農業振興計画」を作成し、1戸、1戸の営農計画や近隣にある標高450m地点の遊休農地の借地計画を樹立し、これの具体的実現に努力している。

すなわち、①現在、栽培技術の高位平準化をはかるため通勤畑地内に「高冷地開発営農試験地」を設置しレタス、ブロッコリーなどの試験を実施して成果の活用普及を図っている。②更に戸沢集落全体が野菜産地の地歩を強めるためアスパラガス、ブロッコリーなどの新品目を導入し面積拡大に力を入れている。その方策として役場、農協、普及所に働きかけ近隣牧草地の活用申請をし、58年度以降は遊休草地30haの利用が計画され、これが、ひいては後継者育成と野菜産地の確立に大きく役立つものと推察される。

6 ま と め

高冷地帯は気温が冷涼で風が強く、また初霜が早くて晩霜は遅い。そのうえ傾斜地が多く不良土壌も多いなど、農業生産における利用ではほぼ「限界地」に近く、低地に比べ作目の選択幅は狭い。しかし、近年道路網の整備や野菜の周年消費化傾向、予冷庫等の整備により次第に限界地的条件が緩和されつつある。このような条件の変化を契機に、組合としては合理的作付体系を確立すると共に、堆肥を確保し畑に増投するなどの改善すべき点も多い。しかも、昭和52年以降高冷地農業に着目し共存共栄精神に基づき通勤方式による野菜作協業に意欲的に取り組み実績をあげてきたことは、本県の高冷地野菜の産地化に大きな役割を果たしたといえる。